比較･現代文化分野への招待

（廣瀬浩司）

比較･現代文化分野とは：生き生きとした創造の場

比較･現代文化分野の私の授業でのキーワードは「芸術・政治・思想の交差点からの**創造**」です。

第一の柱は「表象芸術」。現代アート、建築、コンテンポラリーダンス､映画､演劇からマンガに至るまで、現代にはさまざまな芸術活動がおこなわれています。こうした現場の創造活動へのみずみずしい感性を、比較･現代文化分野はなによりも重視しています。

今年の授業では、現役の写真家やビデオアーティストを招いた授業などもおこなわれています！

第二の柱は、**みなさんが生きている現代社会**の諸問題への鋭敏な問題意識です。昨年は、難民やテロの時代においてどのように「生」を肯定することができるのか、集中的に考えてみました。たんに事態に絶望するのでも、ニヒルに批評するのでもないような、どのような「抵抗」がありうるのか・・・

さらに面白いのは、こうしたふたつの問題が＜思想＞において、密接にからみあっていること。授業では場を与えるだけですが、こうした生々しい場に触れた学生さんたちが、次々と優秀な論文を執筆し、相互に刺激しあってくれています。

おもな主題は・・・

- エイズと文化
- 障害者と身体
- 現代絵画と現代音楽
- ファッションと身体
- ファッション写真研究
- 臓器移植を文化的に考える
- 映画における触覚
- 現代写真家の研究
- コンテンポラリーダンスの身体
- 現代彫刻と身体
- 「声」とは
- 精神医学と文化
- ジプシーの生きる空間
- マグリット研究
- ゴヤ研究
- メルロ＝ポンティ研究
- デリダ研究
- フーコー研究
- ドゥルーズ映画論研究
- アーレント研究

などなど、これまで何十もの卒論や卒業生の修論を指導してきましたが、いずれも優秀な論文ばかり。もちろん思想家についての専門的な論文も書くことができます。

それぞれの学生さんたちが､比較･現代文化分野での授業をきっかけに、＜内発的な＞問題を深めていってくれているのです。

比較･現代文化分野の特徴：ほんとうに開かれた場を求めて・・・

比較･現代文化分野では､若い先生方が多いので、真にみなさんの視点にたって指導して下さる先生ばかりです。ただしいずれの先生も、学際的学問の最先端で活動なさっている先生ばかりですので、安易な妥協は許しません！　でもがんばれば、最後は全面的に応援してくれる先生方が多いのも比較･現代文化分野の特徴でしょう。

いわゆる「文学部」では、たとえばヘーゲルを研究したいというと、「まず哲学史を」「まずドイツ語を」と言われるのが普通。比較･現代文化では、そんな抑圧的なことは言いません。むしろそういった権威に頼った勉強の仕方を軽蔑しています。評価されるのは、現代文化についての高度な感性。その点については、逆に厳しく鍛え上げています。

比較文化学類では語学を重視していますが、比較･現代文化分野では**語学の得意な学生が比較的多いのも特徴的です**。とくに第二外国語に関する関心が強いです。語学のための語学ではなく、むしろ開かれた学問にたいするモチベーションが強いからでしょう。また先生方も、外国に長く留学した国際的な先生方が多いので、語学学習から留学にいたるまで、さまざまな助言をしてくれます。

就職も進学もヒゲンブンから！

進路はさまざまですが、テレビ局、ビデオ製作会社などのいわゆる「業界」や新聞社などマスコミに進んだ学生さんも少なからずいます。

また大学院に進学する学生が比較的多いのも特徴的。それだけ自分が研究し始めたものに深くうちこんでしまう学生が多いのです。筑波大学では人文社会科学研究科・現代文化・公共政策専攻の**＜文化交流論分野分野＞**に進学する人が多いです。また東京大学、大阪大学、京都大学などの学際的な専攻に進学した人も数多くいます。歴史の浅い分野ですが、最近では国際学会などで斬新な発表をしてくれる人も出てきて、頼もしいかぎり。

＋＋＋＋

これまでの授業についてはホームページ（「廣瀬浩司」で検索）を見て下さい。また共著『知の教科書　デリダ』（講談社選書メチエ）の巻末の「知の練習問題」に挑戦してみてください。

他の共著

- 東洋大学哲学講座２『哲学を使いこなす』（知泉書館）
- 『現象学と二十一世紀の知』（ナカニシヤ書房）

現在は、アートにおけるイメージの力についての著書とデリダについの著書を執筆中です。